

建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の 生涯と作品(その3)

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

本誌2015年2月号、Vol.40、No.475と2015年3月号、Vol.40、No.476で「建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の生涯と作品その1、その2」を報じた。筆者はエルンスト・マイの魅力にひかれ、2015年3月に再度フランクフルトに飛びエルンスト・マイの設計した集合住宅の調査を行ったので、結果を報告する。本誌2015年3月号、Vol.40、No.476の25ページ(図3)にそれぞれのジードルングがフランクフルト市のどの位置にあるか、地図で示したので、本報告では省略する。

2015年3月号でニーダーラッドジードルングについて報告した。フランクフルトは大都市だけに鉄道もよく発達している。できるだけ読者が公共鉄道でここに紹介するジードルングに行けるように公共鉄道による行き方を示した。Uとあるのは地下鉄を示す。例えばU1は地下鉄1号線である。Sは高架鉄道を示す。その他は路面電車やバスで行くことが出来る場合もある。1.項でまず訪問したエルンスト・マイがフランクフルトで大活躍していた時代に居住していた自ら設計した旧宅の訪問を報じる。2項から6項では今回訪問し、調査したマイ設計のジードルングを報じる。ブルーノ・タウトがベルリンで多く設計したジードルングは、ジードルングごとにかなり特徴がある。エルンスト・マイのジードルングは2015年3月号で紹介したニーダーラッドの場合はジグザク構造でかなり特徴があった。これに対し、本報で紹介するジードルングは比較的同じようなジードルングである。殆どが白色に塗装された外壁を持つ。居住面積も狭いものが多い。これだけ同じような住宅を紹介するとフランクフルトの住宅はこのようなものかとの印象を読者に与えかねない。しかし、マイ設計のジードルングは他の住宅とは全く異なり、フランクフルトの中で存在感を表している。マイが住宅設計を行った頃は住宅は貴族や金持ちの為に装飾をした大きな住宅が作られていた時代である。これが当時の市長で社会主義者であったラントマンの支援で「一般勤労者も健康な住宅に居住できる

ように」という思想のもとに作られたものである。1920年代に作られた集合住宅が途中修復は行われたものの、100年近くたつ今日まで住み続けられている事は素晴らしい事と考える。

1. エルンスト・マイの住宅 (Wohnhaus May)

U1, U2, U3, U8の何れかに乗車し、リンデンバウム(Lindenbaum)駅で下車し、徒歩でマイの住宅に行くことが出来る。

エルンスト・マイがフランクフルトで活躍していた時代に居住していた住宅は文献3の83ページに“Haus May, Foto Alfred Lauer 1927”として紹介されている。位置的には本誌2015年3月号、図3の“1”の場所である。本報3で紹介するヘーエンブリックのジードルングに近い場所である。この住宅までは高台であるが、住宅の先はフランクフルトの街を流れるニッダー川に向かい緩やかに下がっている。したがってマイの住宅からの眺めは素晴らしい。事実文献3にはマイの住宅の居室からの眺めも紹介されているが、当時は他に建造物もなく現在より更に素敵な眺望であったであろう。素晴らしい場所を選択してマイは自宅を作ったと言える。写真1にマイの住宅写真を示す。写真に見るように、つい最近建設されたかのように見える住宅である。しかしこの写真は文献3の83ページで紹介されているマイの住宅と一致している。現在の居住者がよく改修工事を行い今日まで建設当時の状態を保ってきたのか、または一旦取り壊し、以前と同じ状態で再建したのかは不明である。文献3に示された写真から88年の年月が流れている。ちなみにこの住宅の所在地はLudwig-Tieck-Str. 11である。ドイツでは全ての道路に名前があり、“11”という住居番号も番号順に整然とつけられているので探すことは簡単である。

筆者は2015年3月の調査旅行で1971年から1973年までベルリン工科大学留学中に住んでいたベルリンの集



写真1 エルンスト・マイの住宅

合住宅を訪問した。2015年3月に撮影したこの住宅の写真を写真2に示すが、大変良く管理されており筆者が1973年12月に退去した当時と変わりはない。但し当時この集合住宅に住んでいた人は亡くなった方も含めて皆入れ替わっていた。1971年に入居した際も新築ではなくかなり年季の入った住宅であった。この住宅は今後もベルリンで住まい手は代わっても建ち続けるであろう。と考えるとエルンスト・マイの自宅もマイが設計し建設したままの住宅であると考えてもおかしくはない。住宅は消耗品と考える日本(その証拠に、日本では住宅に消費税がかかる)と住宅を長期に使用するドイツとの違いは大きい。日本の住宅の短寿命とドイツの住宅の長寿命はどういうところから生まれたのか? 気候が相違するからか? 建築構造が違うのか? 建築物理学的配慮の相違か? 住まい方の相違か? 税制や法制度の相違か? 建築仕上技術専門家諸氏にご意見をお伺いしたいものである。

2. レーマシュタット (Siedlung Römerstadt)

UIでレーマシュタット(Römerstadt)まで行くとこのジードルングは近い。

フランクフルト市の建築局が1928年に小住宅建設株式会社(Aktienbaugesellschaft für kleine Wohnungen: ABG)に改組し、ABGが発注した。

1220戸の住宅が建設された。その内1182戸は賃貸住宅であった。賃貸住宅の内訳は4室の1家族住宅が581棟、3室もしくは4室の2家族住宅が50戸という内訳であった。また2室もしくは3室の多世帯住宅が551戸あった。

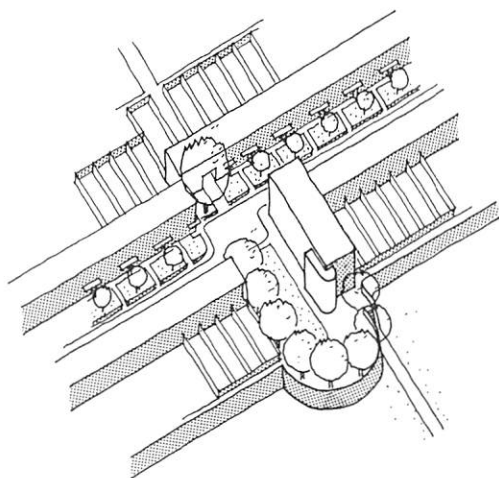
全ての住宅に中央式暖房、浴室、フランクフルト厨房、



写真2 筆者が1971～1973の間居住していたベルリンの集合住宅(2015年3月)

ラジオ受信装置、完全電化による照明、給湯装置、調理コンロが設備されていた。ジードルング全体では、小学校と10軒の店舗が設けられた。

1927年から1928年にかけて建設され、レンガ積工法で、一部木造構造でも陸屋根が用いられた。図1にレーマシュタットのアイソメ図を示す。このレーマシュタットのジードルングはニッタータール(Niddatal)と呼ばれるニッター川の溪谷へ繋がっている。(本誌2015年3月号p25図3参照)。図2にイム・ベルグフェルド(Im Bergfeld)北側住棟の各階平面図を示す。また図3にイム・ブルグフェルド(Im Bergfeld)南側住棟の各階平面図を示す。写真3と写真4にレーマシュタットの集合住宅写真を示す。写真3ではガラス窓に外付けのブラインドが設けられている。図4にイム・ブルグフェルド(Im Burgfeld)の集合住宅の断面図を示す。このように道路を挟み低層の集合住宅が建設されている事がわかる。写真に見るように植栽も豊富である。

図1 レーマシュタットジードルングのアイソメ図⁴⁾

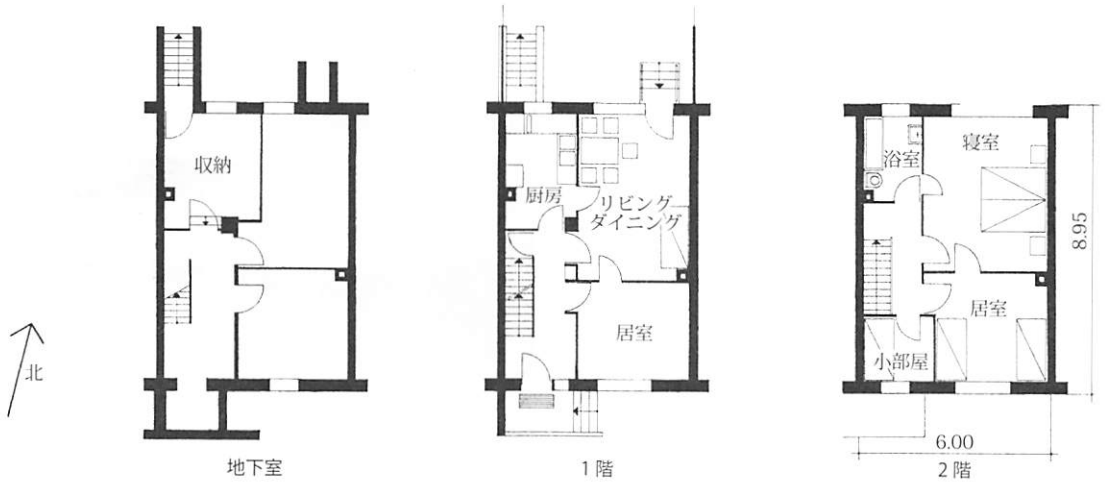


図2 イム・ブルグフェルド (Im Bergfeld) 北側住棟の各階平面図⁴⁾

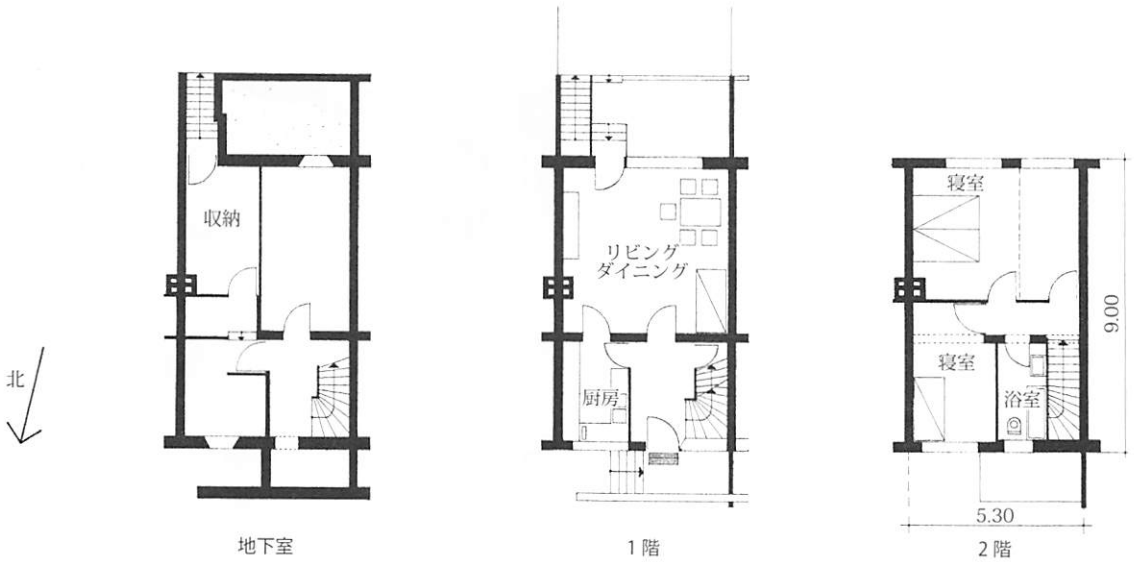


図3 イム・ブルグフェルド (Im Bergfeld) の南側住棟の各階平面図⁴⁾



写真3 レーマーシュタットの集合住宅



写真4 レーマーシュタットの集合住宅

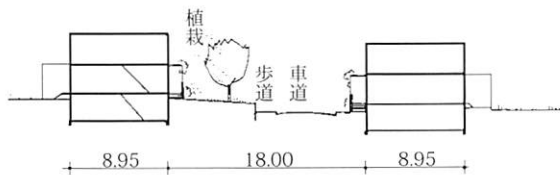


図4 イム・ブルグフェルド (Im Bergfeld) の集合住宅の断面図⁴⁾

3. ヘーエンブリックのジードルング (Siedlung Höhenblick)

U1, U2, U3, U8の何れかに乗車し、リンデンバウム (Lindenbaum) 駅で下車し、徒歩でこのジードルングに行くことができる。

このジードルングは前述の通りマイの住宅に隣接している。従ってニッター川を眺める高台に建設されており、眺望は素晴らしい。集合住宅が建設されている道路をヘーエンブリック (Höhenblick) と言う。ヘーエンブリックとは「高台の見晴し」といった意味である。ヘーエンブリックの標識を写真5に示す。ここに建つ集合住宅が写真6である。住宅は白色に塗装され、陸屋根である。現在では陸屋根の集合住宅は多いが当時は極めて斬新的なものであった。モダニズム建築の象徴でもあった。住宅の隅角部ではガラス窓で構成されていることが分かる。明るい室内空間が保たれる。この手法はブルーノ・タウトがベルリンのカール・レギンの集合住宅で用いた手法^{註1)}と同じである。この写真に見るように住宅の前には白樺が沢山植えられている。筆者が写真撮影を行ったのは2015年3月末である。辛うじて白樺は芽吹いていない。もう少し遅く訪問していれば住宅は白樺の葉の陰になり、写真撮影しても建物を撮ったのか、白樺を撮ったのか分からなくなってしまう。しかし3月の末よりも早く写真撮影を行うとドイツの冬は非常に寒く、長い撮影作業には耐えられなくなる。3月末が建築写真撮影には適した時期である。写真7にこの住宅の庭側から見た写真を示す。3階建てで、恐らく3階部分は屋根裏部屋として設計されたものであろう。1, 2階とセットバックしている。そのセットバック部分がテラスになっているが、ここには植木鉢などが並べられていた。



写真5 ヘーエンブリックの標識



写真6 ヘーエンブリックの集合住宅



写真7 ヘーエンブリックの住宅の庭側

4. ボルンハイマーハングのジードルング (Siedlung Bornheimer Hang)

路面電車14に乗車しエルンスト・マイ・プラッツ (Ernst-May-Platz) 下車もしくは路面電車12に乗車し、ザールブルグアレー (Saalburgallee) 下車、U7でアイスシュポルトハレ (Eissporthalle) 下車、あとは徒歩

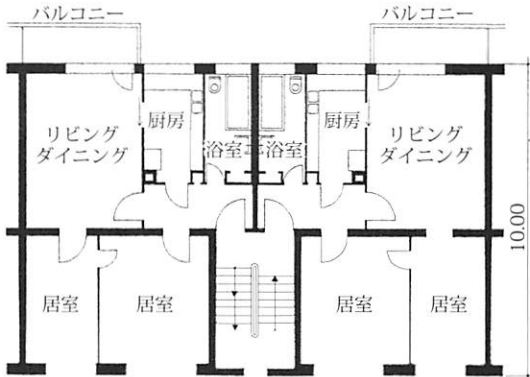


図5 ボルンハイマーハング・ジードルング延べ床面積65㎡の3室住宅の平面図⁴⁾

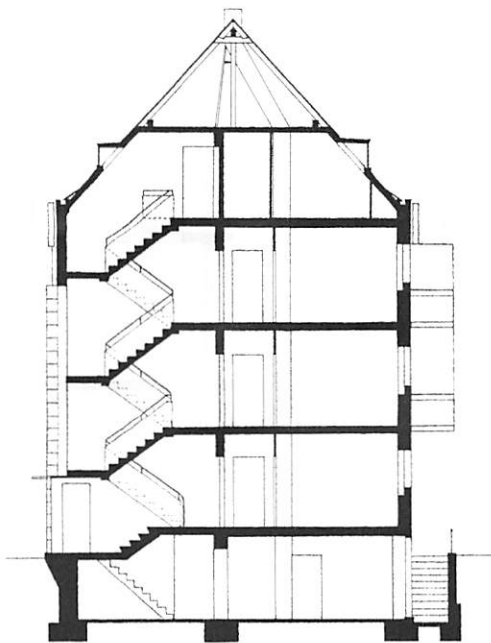


図6 ボルンハイマーハング・ジードルングの集合住宅断面図⁴⁾

でこのジードルングに行くことができる。

発注者は小住宅建設株式会社(Aktienbaugesellschaft für kleine Wohnungen : ABG)である。

1540戸の賃貸住宅が建設された。その内のほとんどが延べ床面積65㎡の3室住宅、もしくは延べ床面積55㎡の2室住宅であった。延べ床面積105㎡もしくは86㎡のやや広めの一家族用住宅は63戸あった。

住宅には中央式暖房、浴室、フランクフルト厨房、最上階には屋根裏部屋、そしてラジオ受信装置が設備されていた。ジードルングには商店、暖房ステーション、洗濯場、



写真8 ケトラアレー(Kettelerallee)の集合住宅

教会、青空市場の場所などが備えられた。

延べ床面積65㎡の3室住宅の平面図を図5に、集合住宅断面図を図6に示す。ケトラアレー(Kettelerallee)の集合住宅の写真を写真8に示す。

5. リーダーヴァルトのジードルング (Siedlung Riederwald)

U7でシェフレシュトラッセ(Schäfflestraße)下車である。

フランクフルト市の建築局が1928年に小住宅建設株式会社(Aktienbaugesellschaft für kleine Wohnungen : ABG)として改組され、そのABGが発注した。313戸の賃貸住宅が建設され、その内訳は4室もしくは5室からなる1家族住宅が163戸、3室からなる2家族住宅が30戸、1室、もしくは2室、もしくは3室からなる複数家族住宅が120戸という構成であった。全ての住宅に浴室、フランクフルト厨房、暖炉による暖房、屋根裏部屋、庭もしくはバルコニーが設置された。ジードルング全体ではカフェー、小学校、一般公共施設が設けられた。全体計画はエルンスト・マイとベーム(Boehm)が行った。1926年から1927年にかけて建設された。構造材料としてはレンガ造、一部は軽量コンクリート、さらに有孔コンクリートブロックが使用された。

図7にジードルングのカール・マルクス・通り(Karl-Marx-Straße)の住宅アイソメ図を示す。この部分の写真を写真9に示す。写真に示すように両翼の住棟は少々老朽化が進んでいる。この住棟(カール・マルクス通り3-13)の1階、2階、3階の平面図を図8に示す。これは1家族住宅で延べ床面積は63㎡と広くはない。まさに当時の労働者住宅である。

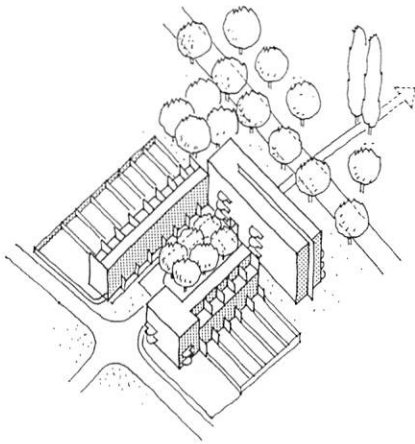


図7 カール・マルクス通りの住宅アイソメ図⁴⁾



写真9 マール・マルクス通り集合住宅(図6)のアイソメ図に相当部分

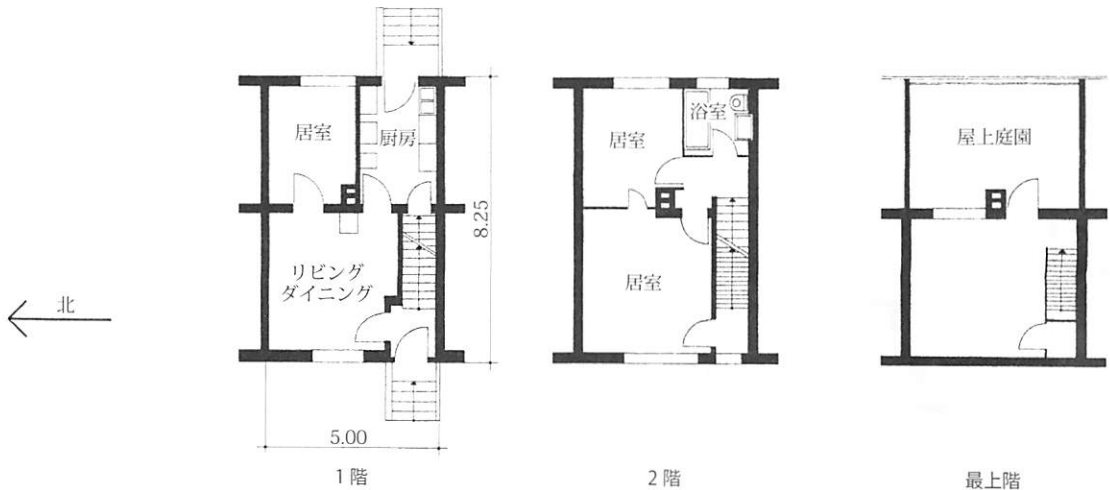


図8 リーダーヴァルト・ジードルング、カール・マルクス通り集合住宅1階、2階、3階の平面図⁴⁾

6. ヘラーホーフのジードルング (Siedlung Hellerhof)

路面電車10, 11, 21でレープシュテッカーシュトラッセ (Rebestöcker - Straße) 下車である。

発注者はヘラーホーフ株式会社 (Aktiengesellschaft Hellerhof) である。

賃貸住宅1194棟からなる。その内33㎡の3階建て、2部屋住宅が68棟ある。また43㎡、もしくは48㎡4階建て、3部屋住宅が822棟ある。66㎡もしくは73㎡、5階建て4部屋住宅が304棟ある。全ての住宅に庭園、浴室、フランクフルト厨房、さらに中央式暖房が設置してある。ジードルング内には19の店舗と暖房ステーションがある。施

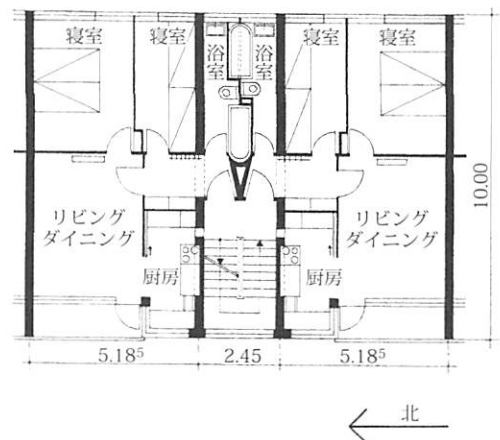


図9 ヘラーホーフジードルング2家族住宅の2階平面図⁴⁾

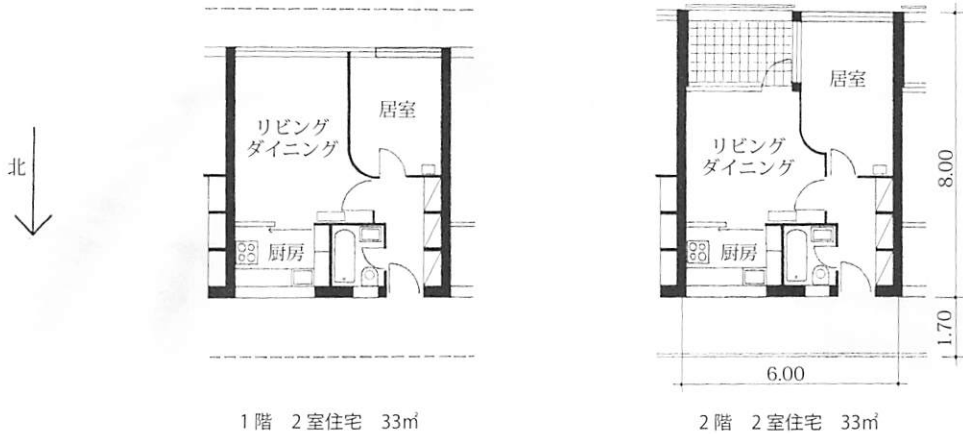


図10 ヘーラーホーフジードルング3階建住宅の1階と2階の平面図⁴⁾



写真10 ヘーラーホーフジードルングの集合住宅



写真11 商店と住宅が混在するヘーラーホーフの集合住宅



写真12 ヘーラーホーフジードルングの暖房ステーション

工はフィリップ・ホルツマン社(Philipp Holzmann)が担当し、鉄筋コンクリート造とれんが造建築が混合している。図9に2家族住宅の2階平面図を示す。3部屋住宅で、床面積は48㎡である。図10に3階建住宅の1階と2階の平面図を示す。床面積は33㎡である。このジード

ルングの集合住宅を写真10、商店と住宅が混在する棟の写真を写真11に示す。またジードルングの中央にある暖房ステーションを写真12に示す。

7. フランクフルト厨房の追記 (Frankfurter Küche)

フランクフルト厨房に関しては本誌2015年3月号で紹介した。今回の調査で3月23日に再度レーマージードルング内にあるエルンスト・マイ・ハウス(所在地: Im Burgfeld 136, Frankfurt/M.)を訪問し、フランクフルト厨房を見せて頂いた。前報の写真では説明が不足する部分をここに追記する。フランクフルト厨房はウイーン出身の女性建築家グレーテ・リホツキー (Grete Lihotzky, 1897~2000)により研究開発された。主婦の家事作業の時間と労力の無駄を省く事に力点を置き、家事作業と工場の労働、事務所における労働との比較を



写真13 フランクフルト厨房の調理オープン



写真14 常時は壁に立てて収納してある厨房内のアイロン台



写真15 厨房上部の食器収納棚

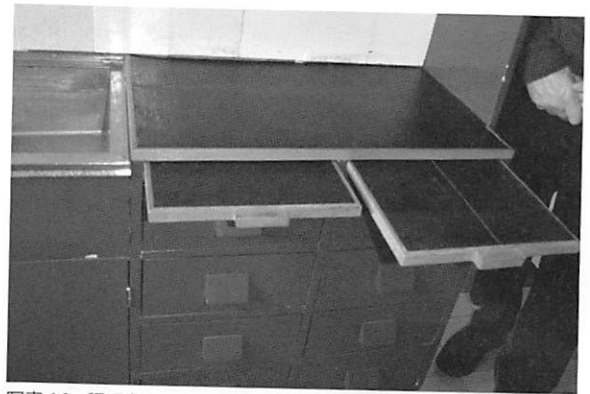


写真16 調理台とその下にある引き出し式のプレート

行っている。家事作業は時間制限が無いので、ついルーズに陥りがちで、時間や労力を浪費している。家事労働においても企業経営者が努力している何らかの合理化が必要であると説いている。^{13,15)}

またその合理化について「厨房は実験室や特に薬局と類似している。実験は作業がスムーズに行くように実験員、研究者の動線を考慮し無駄が無いように配慮されている。これを見習うべきである。厨房においては香辛料、その他例えばコーヒー、ココア、等を容器に収納するが、これがどこにあるか、整理すべきで、その為の収納部を設けるべきである。薬局で、薬品にレッテル(ラベル)を貼っているように香辛料などにおいても容器にラベルを貼るべきである。収納棚の引き戸は外から収納物やそのラベルが見えるようにガラスを使用すべきである。」と記している。¹⁴⁾

写真13に調理オープンを示す。オープンの右は電気オープンであるが、左は薪など固形燃料を使用するようになっている。電気オープンの上部は調理用プレートが設けられている。写真14に常時は壁に立てて収納してあ

る厨房内のアイロン台を示す。このアイロン台本来の用途のほかに、給食数が多い時には予備の配膳台としても使用された。写真15に厨房上部の食器収納棚を示す。リホッキーが報文で書いているようにガラスの引き戸が用いられ、内部の収納された食器が見えるように配慮されている。このような収納方法をリホッキーは当時の薬局から学んだ。写真16に調理台とその下にある引き出し式のプレートを示す。このプレートは調理にも使用されたし、調理で裁断された野菜くずなどを一時的に置く場所としても使用された。なにしろフランクフルト厨房とは床面積で6.43㎡(1.87m×3.44m)という極めて狭いものであった。このような狭い厨房では面積を有効に使用できるような工夫があちこちで行われていた。写真17に仕切りが施された引き出しを示す。仕切りにより収納が整然と行われた。写真18に電気による局所暖房器を示す。フランクフルト厨房はエルンスト・マイ・ハウスの中にある。エルンスト・マイ・ハウスには厨房だけでなくその他の展示も行われている。例えばマイが使用したライカも展示されていた。当時はドイツ製カメラが世界を凌



写真17 仕切りが行われた引き出し

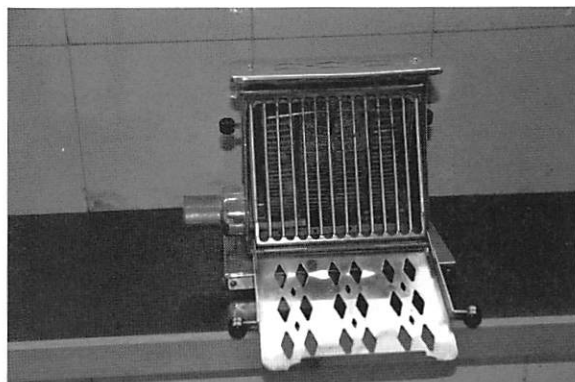


写真18 電気加熱局所暖房器



写真19 エルンスト・マイが愛用したライカ

駕していた。その中でもライカはコンタックスと並んで超高級機であった。カメラは建築家の武器として使用された。ブルーノ・タウトも写真を好み日本で沢山撮影した。タウトはナチスの危険人物リストに自分が載っている事を知り突然ドイツを去らなければならなかったせいか、あまり高級機を使用したようでなくピンボケ写真も多い。^{註2)} 写真19にマイ・ハウスに展示されているマイ使用のライカを示す。

フランクフルト厨房は本報でも記したようにマイが設計した殆ど全ての住棟で採用されている。これはドイツヴェルクブント^{註3)}が目指した簡素化、規格化、そして大量生産という考えに基づくものである。こうして従来、住宅は貴族や富裕層の為に作られていたものを一般労働者階級の手が届くものとしたのである。しかし、この簡素化、規格化、大量生産が一番威力を発揮したものは残念ながら鉄砲、弾薬と言った武器の製造であった。第一次世界大戦で敗戦国となったドイツは工業力が付くと武器製造も始めるようになった。しかも攻撃力のある優秀な武器、戦闘機、U-ボートに代表される戦艦、潜水艦まで

製造するようになった。

8. エルンスト・マイの墓所 (Grab von der Familie May)

エルンスト・マイは1886年にフランクフルトで生まれ、1970年9月11日にハンブルグで亡くなっている。フランクフルト中央墓地のマイ家族の墓所に埋葬された。筆者は2015年3月23日にフランクフルトの郊外ロートハイム在住で日本にドイツに関する情報を発信しておられる大澤武男さん^{註4)}にご案内いただきマイの墓地を訪問する事ができた。マイの墓石を写真20に示す。^{註5)}マイと夫人のイルゼ(Ilse, 1899~1974)の名を記した部分を写真21に示す。マイがフランクフルトで活躍できたのは当時の市長ラントマン(Ludwig Landmann)の引



写真20 マイ家族の墓



写真21 マイ夫妻の名を記した墓標

立てがあった事は本誌2015年2月号で述べた。同市長はフランクフルトを流れるメイン河に港を作り、物流に成功をおさめ、さらに高速道路(アウトバーン)を南北(ハンブルグ・フランクフルト・バーゼル)に建設しフランクフルトを交通の要とした。現在のフランクフルト国際空港に隣接するアウトバーンのインターチェンジはドイツ最大規模のものである。この建設もラントマン市長によって行われた。その上フランクフルト空港を建設し、現在では同空港はドイツで一番重要なハブ空港、国際空港となっている。このような腕利きの都市計画家でもあったのである。ラントマンはユダヤ系ドイツ人であった為、ナチス政権下ではオランダに亡命していた。1868年に生まれ1945年3月5日にオランダで亡くなった。フランクフルトへ戻ることを希望していたが、ドイツ無条件降伏(1945年5月8日)の2ヶ月前に希望を果たせず亡くなった。墓地はやはりマイが埋葬されているフランクフルトの中央墓地にある。



しかもマイの墓のすぐ近くである(写真22)。2015年3月5日は没後70年という事でフランクフルト市議会からの花輪が献げられていた。このような事からもラントマンは敬愛された市長であった事がわかる。しかもドイツの寒さのお陰か筆者が訪問した3月23日でも花は枯れてはいなかった。

写真22 エルンスト・マイを引き立て、マイも尊敬した当時のフランクフルト市長ラントマンの墓標

おわりに

本稿でエルンスト・マイが設計したジードルングには「ラジオ受信装置が設備されていた」といった事を書いた。当時ラジオ放送が急速に発達した時代であった。個人演説からラジオを使用したプロパガンダへ移行した時代であった。ヒトラーは演説の研究、訓練を行い、かつこれをラジオを通じて全国へ流すことを行った。その影響力は絶大でナチス党は国民の支持を得、正当な選挙で政権を取得したのである。その結果、社会主義者であり、母親がユダヤ人であったエルンスト・マイはアフリカへ亡命をした。

筆者がフランクフルトを訪問した直前にフランクフルトの開発の遅れた場所オストエンド(Ostend)^{註6)}に欧州



写真23 フランクフルトに竣工した欧州中央銀行

中央銀行のガラス張り超高層建築が竣工し、開業をした(写真23)。その為に欧州各地からこれに反対するデモ隊が集まり、騒動があった。欧州中央銀行が発足した事で、フランクフルトは金融の要としてますます重要な役割を果たすであろう。この中央銀行の周囲には高級マンションが建設され、高値にもかかわらず次々に完売となったそうである。看板を見ると“ABG Frankfurt Holding”となっていた。これはマイが勤労者の為に集合住宅を建設していた当時の発注者である。時代の変化と共に勤労者を対象としていた会社が富裕層を対象とした営利会社に転換していったという事になる。現在のフランクフルト市長はペーター・フェルドマン(Peter Feldmann)というSPD(社会民主党)党员である。マイを引き立てた腕利きの市長ラントマンもSPD(社会民主党)所属であったが、現在のフランクフルト市議会は保守党のCDU(キリスト教民主同盟)が支配しており、いわゆる「ねじれ現象」が生じている。フェルドマン市長も難しいかじ取りを迫られているのであろう。

〈註〉

- 1) カール・レギンの住宅街(Wohnstadt Carl Legien);ブルーノ・タウトが1928~1930年にベルリン市のプレントラウアーベルク(Berlin Prenzlauer Berg)に建設した住宅団地でベルリンのモダニズムとしてユネスコの世界文化遺産に登録されている。隅角部をガラス窓で構成した住棟を写真24に示す。この住棟には最近ブルーノ・タウトの建築保全に努力されてきたベルリンの建築家ヴィンフリート・ブレンネ(Winfried



写真24 カール・レギエンの住棟隅角部



写真25 ドイツの名俳優プッフホルツが青少年期を過ごした住棟と銘板

Brenne)さんにより「カール・レギエンの住宅街はGEHAG(ベルリン住宅供給社)により1929年に建設された」という文字が再度建物に取り付けられた。これは当初の建設時には有ったものであるが、長期にわたり取り外されていた。この住宅団地にはドイツの人気男優ホルスト・プッフホルツ(Horst Buchholz 1938~2003)が1938~1951年の間住んでいた住棟がある(写真25)。プッフホルツは多くの映画、テレビ、劇場で活躍し、特に映画「ティーンエイジャー」(Halbstarke)で当時の道徳・習慣を無視する奔放な青少年を演じて有名となった。Halbstarkeとは「半分強い」といった造語である。これに倣いHalbzart「半分の情愛」という映画も上映され人気があった。これは戦争で両親を失った女子高校生が建築家の兄に養育されている。ところがこの高校生が兄の友人、しかもかなり年上の男性に恋心を抱き、年齢差は関係が無いとしてついに結婚してしまい仲間の女子高校生から祝福を受けるという他愛のないストーリーであった。ザビーネ・シーニエという女優が主演を努めた。日本でこの映画は「大人になりたい」という題名で上映された。これに引き続き同じタイトル(Halbzart)の映画がオーストリア、ドイツでも作られたがこれはコミックになっていた。

- 2) 酒井道夫・沢良子「タウトが撮った日本」2007
- 3) ヴェルクブンド(Werkbund) ; 1907年にドイツで創立された、創造的作業と産業の協同により、産業活動の向上を目的にした連盟。わが国では従来「工作連盟」と訳されてきた。これは小中学生が本立てなどを造る工作と間違えかねない。以前の住宅は貴族のものであった。一般労働者の住宅は非常に粗末なものであった。ドイツ革命以来一般労働者も健康な住宅に住めるようにといった社会主義の運動もこのヴェルクブンドには含まれている。簡単に工作連盟と訳すべきではないと筆者は考える。英米の文献を見てもあえて翻訳せず、German Werkbundと書いている場合が殆どである。本稿では工作連盟という訳語を使用せず、ドイツヴェルクブンドとした。
- 4) 大橋武男 ; 1942年埼玉県本庄市生まれ。上智大学文学部史学科卒、同大学院修士課程修了、ドイツ政府給費留学生。1980年ヴェルツブルグ大学博士号取得。専攻はドイツ・ユダヤ人史、古代教会史、著書に「ユダヤ人とドイツ」、「ヒトラーとユダヤ人」、「ユダヤ人とローマ帝国」、「ユダヤ人最後の楽園」(いずれも講談社現代新書)、「コンスタンティヌス」(講談社)「ローマ教皇とナチス」(文春新書)ほか多数。フランクフルト郊外のロートハイム居住。
- 5) 1912年にマイはクレメンス・ムッシュ (Clemens Musch,

1878~1957)と共にフランクフルトに共同の建築設計事務所を開設する。最初に実現した仕事が祖父マルチン・メイ(Martin May)から与えられたマイ家の墓標であった。これは祖父マルチンの夫人アンナ(Anna)が1912年1月8日に亡くなった事による。写真に見るようにドーリア式の柱を設け、装飾豊かなネオクラシックでアール・ヌーボーの要素も含むものである。フランクフルトに残したモダニズムの作品とは異なった雰囲気を見せているが、これも発注者の祖父の意向によるものであろう。³⁾

- 6) オストエンド(Ostend) ; これは英語表現をするとイーストエンド(East End)である。ロンドンのイーストエンドは低所得者層が住むロンドンの東部であるが、フランクフルトも市の東部が発展が遅れやはり低所得者層が住んでいた。米国の都市も東部は同様に低所得者層が住んでいるし、東京も最初は大森、田園調布など西部に富裕層が住み、江東、江戸川区はどちらかという低所得者が住んだ。

〈参考文献〉

1. 田中辰明、月刊建築仕上技術 2015年2月号Vol40, No.475「建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の生涯と作品その1」
2. 田中辰明、月刊建築仕上技術 2015年3月号Vol40, No.476「建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の生涯と作品、その2」
3. Claudia Quiring, Wolfgang Voigt, Peter Cachola Schmal, Eckhard Herrel, "Ernst May 1886-1970" Prestel
4. DW Dreysse "May - Siedlungen, Architekturführer durch acht Siedlungen des neuen Frankfurt 1926-1930" Verlag der Buchhandlung Walther König
5. 田中辰明・柚木玲「建築家ブルーノ・タウト-人とその時代、建築、工芸 オーム社
6. 田中辰明 「ブルーノ・タウト・日本美を再発見した建築家」、中公新書2159
7. 田中辰明 「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
8. 田中辰明 「バウハウス(ヴァイマル)」月刊建築仕上技術2014年8月号、工文社
9. 田中辰明 「バウハウス(デッサウ)」月刊建築仕上技術2014年9月号、工文社
10. 田中辰明 「バウハウス(ベルリン)」月刊建築仕上技術2014年10月号、工文社
11. 田中辰明 「ナチス好みの建築」月刊建築仕上技術2014年11月号、工文社
12. 田中辰明ホームページ <http://tatsut.org/>
13. G. Lihotzky, Die Frankfurter Küche"- Typisierte Küche des Hochbauamts Frankfurter a. M. In" Sonderdruck aus STEIN HOLZ EISEN Nr.8 vom 24.2.1927(Schaukasten: Die Frankfurter Küche, Eine museale Gebrauchsanweisungより採録)
14. Grete Lichtzkyä Rationalisierung im Haushalt, in Das Neue Frankfurt t1. Jg. 1927 Nr.5, S 120-123 S. 120 (Schaukasten: Die Frankfurter Küche, Eine museale Gebrauchsanweisungより採録)
15. Grete Kihotzky Einiges über die Einrichtung österreichischer Häuser unter besonderer Berücksichtigung der Siedlungsbauten, in Schlesisches Heim, 8, 1921, S 221(Schaukasten: Die Frankfurter Küche, Eine museale Gebrauchsanweisungより採録)